

翻訳の分かりやすさはどこにあるのか

藤本 幸伸

What makes translation reasonably readable?

FUJIMOTO Yukinobu

(Received September 30, 2011)

最初に断っておかねばならないことがある。それは、「翻訳の分かりやすさ」と翻訳全般を指すような表現を使っておきながら、本稿で取り上げるのは日英語間の翻訳、中でも英語から日本語への翻訳に限定している点である。更に、わずかしかり取り上げていない英文は1960年代に書かれた評論文で、その翻訳は1970年代に出版されたものに限定している。パラグラフ単位の文章を扱って紙幅を取ってしまったことと、経年で翻訳の日本語がどのように変化してきたのかを今後検討してみたいからである。

本格的に調査したことではないのだが、過去30年間の翻訳動向を振り返ると、1976年創刊の『翻訳の世界』を舞台に活躍した別宮貞徳氏の欠陥翻訳時評を皮切りに、1980年代は中村保男・河野一郎・安西徹雄・飛田茂雄らが文芸書を中心に翻訳の心構えや翻訳技法について多くの書物を生み出し、『通訳・翻訳ジャーナル』（1985年10月創刊）に見受けられるように一大翻訳ブームが訪れた。このブームに平行して、巷には翻訳学校が雨後の竹の子のように開校し、多くの翻訳マニュアルが作られた。1990年代にはいると、これまで都市部でしか受注が難しかった産業翻訳が、インターネットの普及と相まって、地方でも受注可能となり産業翻訳従事者が一挙に拡大し、2000年を迎える頃には新規参入は困難な状態に達した観がある。コンピュータ関連の翻訳は飽和状態に入って久しく、わずかに残った医療や特許などの領域も語学知識以外に専門知識が必要となり、新たな参入はますます困難になっている。

このような翻訳を巡る状況が困難さを増すにつれ、従来大学人の領域であった人文科学の翻訳にも変化が訪れる。山岡洋一、土屋政雄、長谷川宏、中山元、鴻巣友季子など大学人ではない翻訳家が質の高い翻訳を次々と産出して、それまで読み取り困難であったアダム・スミス、ヘーゲル、ニーチェ、ブロンテなどの古典作品が新たに翻訳されていき、読者層に歓迎されているのは記憶に新しいであろう。このような翻訳の担い手の交替と時期を同じくして、翻訳論あるいは翻訳研究もその中心を文芸から言語学へと移していく。欧米では1990年代頃から Translation Studies と銘打つ翻訳研究が、ナイダの提唱する「等価」説を批判的に継承し、談話文法や機能文法などの言語学の知見や、ジェンダー論・ポストコロニアル論などの文化研究をも吸収して、翻訳を単なる言葉の移し替えの次元を遙かに超える知的領域へと引き上げている。

気恥ずかしくなるくらい大雑把な翻訳を巡る出来事の復習だが、私見では高度に発達した翻訳研究でもその多くが単文レベルの翻訳を中心に取り上げているように思われる。誤訳をあげつらう翻訳本に至っては、単語レベルの指摘に始終して得々としている。今日余程のひねくれ者でもない限り、野上豊一郎の「単色版的翻譯」を実践して、“The world is all before us.”と

いう文を「世界はみなわれわれの前にある」と訳して、「それでわからない奴にはわからないでもよい」(野上、226-7)と平然とする者はいまい。ここ10年に出版されたどの翻訳書を見ても、原文に工夫を加えずに訳出する翻訳書はないのではないかと思われる。例えば、次の例文を試みよう。原文とその直訳、そして出版された翻訳の順で挙げておく。

One might speculate about the reasons for this omission. It could be argued that the assimilation of the children of working-class parents into the white-collar professoriate has dulled academic sensitivity to the reality of socioeconomic difference. (Dimock and Gilmore, 215-6)

人は、この省略の様々な理由について思いを巡らしてもよいだろう。労働者階級の親を持つ子供たちのホワイト・カラーである教授職への同化は、社会経済的差違という現実へのアカデミックな感受性を鈍らせてしまっていると議論されるだろう。(試訳)

なぜ階級がこのように除外されてしまうのかということに関しては、様々な考えがあるだろうと思う。両親が労働階級である子供たちが、ホワイト・カラーである大学団の構成員となって同化してしまったことが、社会経済的な差違という現実に対する学者としての感受性を鈍らせてしまったという議論をすることもできよう。(ディモック・ギルモア、276)

試訳に比べて出版翻訳の方は2割ほど長めになっており、その分訳出に工夫 (the reasons for this omission や the assimilation 以下の名詞句を「なぜ~しまうのか」「…が~同化してしまった」と動詞へ読み解くなど) がされているのが分かる。

だが、一文一文の工夫はわかるのだが、一つあるいは複数の段落を読み進めていくうちに、少しずつ内容がわからなくなっていく、そんな翻訳があるのも事実である。本稿の目的は、一つあるいは複数の段落を基準とした場合、その翻訳の読みにくさはどこにあるのか、同じことだが、どう訳せば読みやすくなるのかを具体的な例を基にして考えていくことにある。

次の翻訳は、何が言いたいのであろうか。「ピラネージのヴィジョン」とは、バロック建築の完全にコントロールされた秩序空間に対する抵抗を意味している。スペイン階段のような広やかな空間で人は自由に行動できそうだが、階段上方にはオベリスクが位置し、それとは感じさせないように、最終目的のオベリスクを中心に人間の自由な行動を秩序付けている。このような人間中心の秩序空間への抵抗として、ギリシャ建築以来の垂直的なコラムを拒否したり曲線による意想外な空間構成したりしたのが、ピラネージの世界である。

一九世紀初期の建築家たちや、その後の建築家たちの多くは、ピラネージのヴィジョンの新しい特質を理解していた。たとえば、イングランド銀行のためのサー・ジョン・ソーンのインテリアのいくつかは、ほとんど直接それからひきだされたかのように見える。また彼の自宅のインテリアも同様である。アーチはエンタブラチャーにさまたげられることなく、壁から流れるように噴出し、ひかりは思いもよらない場所からそそぎ込み、ヴィスタはいかなる明確な終端部もなく、不可思議につづいている。しかしながら、みずから言語によって、ピラネージの世界を適当なスケールで構築したのは、一九世紀の物質主義やヒューマニストの伝統に由来する実証主義から全的に解放されていた近代技術者であった。バクストンの水

晶宮（一八五一年）はマッスや圧縮力による旧き不動性を打ち破っており、薄い鉄の部材からなる骨組構造は彼の同時代人たちによって、讚嘆の眼差しで眺められたのである。それは、その中へと彷徨い込むべき場所であり、ガラスだけで仕切れ、ソリッドは錯綜したウェブに断片化されている。一八八九年、フランス万国博のために建てられたエッフェル塔は、同様な強制を行なったものであり、近代のパリのランドマークとなってきた。だが、同じ博覧会の機械館は、最も適切なプログラムを見出したものである。すなわち、スリー・ヒンジ鋼製アーチがペーヴメントから連続的にはね出し、室内いっぱいの機械装置や小さな人間たち、すなわち、ヘンリー・アダムスのダイナモやその崇拜者たちの群れの上方に到達する。マックス・ベルクの鉄筋コンクリートによる壮麗な構造であるブレスラウの百年祭ホール（一九一三年）では、アーチは振れた曲線となって上方へぬっと突き出され、大衆政治家にとって適切な環境を創り出している。はげしい連続性と個人の卑小さがここでも再びテーマになったのだ。ノースー・カロライナのラレイに一九五三年建設されたリヴストック・パヴィリオンでは、屋根はピラネージのアーチそのもののようにはねだし、視界の終端部の外へ逃れ去る連続的な交叉アーチから吊り構造で支えられている。これらすべてのやり方によって、旧き不動性は克服され、マッスの中の人間は、近代世界そのもののイメージである建築の環境を与えられてきたのであり、その中では彼らが誰であるのか、どこにいるのかということを正確には知ることがないのである。（スカーリー、16-21 強調は引用者、また本文中の図番号は省略した）

繰り返し読み返し下線部分に注意することで、何とか言いたいことが分かりそうな気がしてくる、そんな翻訳である。おそらくバロック建築の人工的に区切られた秩序空間に対して、ピラネージ的な近代建築は現実空間の連続性と中心から退場した人間の不安定さを表している、ということなのだろう。なぜこのように読みにくいのだろうか。訳者は、何の工夫もしていないのだろうか。上の引用文から最後の部分だけ、原文と見比べておこう。

① In Max Berg's splendid structure of reinforced concrete, the Centennial Hall at Breslau, of 1913, the arches loomed upward in a twisting curve, creating the appropriate environment for mass political man. ② Violent continuity and the smallness of the individual were, here again, its themes. ③ In the Livestock Pavilion at Raleigh, North Carolina, of 1953, the roof is suspended in tension from continuous, intersecting arches, leaping out and away from the edges of vision like Piranesi's arches themselves. ④ In all these ways the old stabilities have been upset, and human beings, in the mass, have been given an architectural environment which is an image of the modern world itself, in which they do not know exactly who or where they are. (Scully, 13 各文頭の丸数字は引用者)

第一文では、creating 以下の分詞構文を「～しながら」と訳し返すことなく、左から右へと情報の流れに沿って訳出しているし、第三文の“the roof is suspended in tension from continuous, intersecting arches”は「屋根はピンと吊り下げられている」ではなく「屋根は…連続的な交叉アーチから吊り構造で支えられている」と工夫がある。関係詞が二つ連続する第四文では、「人間は、…建築の環境を与えられてきたのであり、その中では…正確には知るこ

とがないのである」と、これも情報の流れに即した訳出となっている。このように一文一文を突き合わせて訳者の工夫の跡を辿ってみると、一体どこが分かりにくかったのかが逆に不透明になってしまう。確かに“violent continuity”は「激しい連続性」だし、“they do not know exactly who or where they are”は「彼らが誰であるのか、どこにいるのかということ」を正確には知ることがない」である。しかし、読みにくいのはなぜだろうか。

翻訳の読みにくさ（あるいは読みやすさ）を考える前に、翻訳をどう評価するのか、どのように翻訳すればよいのか、その基準は何かなどを簡単に確認しておこう。現在の翻訳研究は、翻訳対象である文書分野も多岐に亘っており、この多様化に伴い翻訳研究が扱う領域も格段に広がっている。1960年代のNidaの等価効果の原理が更に深化し、単語や文を超えたテキストの機能や特性に注目して起点言語と目標言語間で等価をいかに生み出すか理論化しようとする機能的翻訳理論、起点言語よりも目標言語を重視するSkopos理論、Halliday理論を援用してテキストを詳細に分析し起点言語と目標言語間の等価を確保しようと企む談話分析、翻訳を文化的・歴史的システムと見なして、起点言語の文化歴史を目標言語でいかに再現するかに注目するシステム理論、翻訳を「書き換え」と捉えて「書き換え」によってある文化のイデオロギーが他文化にどのように翻訳されるのかという文化研究にまで翻訳を広げるものまで、翻訳研究といってもどこに視点を置くかで、翻訳の評価が変わってくる。ここでは、談話分析による詳細なテキスト分析を基にして、起点言語の意味と表現効果を目指言語にどのように移行するのか、そして評価の基準をどこにおくのかを考えてみたい。¹⁾

まず、スカーリーの『近代建築』(*Modern Architecture*)²⁾が出版されているThe Great Ages of World Architecture Seriesは、ギリシャ・ローマの建築はもとよりイスラム・中国・インドそして日本など世界の建築を一般読者に紹介する200頁にも満たないシリーズである。起点言語（ここでは英語文を指す）の読者も、建築の専門知識を持たない一般読者を想定していると考えてよく、目標言語（ここでは日本語）の読者も建築の専門家だけでなく建築に関心を持つ一般読者を想定しているはずだ。現に、翻訳されたSD選書には建築を扱うものだけでなく、『ギリシャ神話と壺絵』『「いえ」と「まち』』など一般読者を想定した表題が並ぶ。このような想定から建築の専門知識を持たない読者に対して、目標言語である日本語として分かりやすい翻訳や時には訳者の判断によって用語説明を加えた翻訳が望ましい翻訳と仮定できる。一々原文と突き合わせて翻訳文を解説するといった奇態な読書行為を強いるような翻訳は「不可」と判断してよいのだ。

では、どう訳せば分かりやすい翻訳と言えるのであろうか。誰もが翻訳に関しては一家言を吐く今日、ある人にとってのよい翻訳が別の人にとってはデタラメに映ることは多い。翻訳への関心の高さの割には翻訳評価の基準が共有されているわけでもないのに、勢い単語・単文レベルの誤訳指摘に始終することになる。分かりやすさの基準は、原文をどう評価するのか（常に名文で神聖不可侵と見なすので、原文の順番や品詞を変えるなどもってのほかと評価するのか）、また原文をどう分析するのか（どこまでを一単位つまり翻訳単位と見なすのかが、読み手の文法と構文の知識に依存する）によって変わってくる。スカーリーの原文を分析しながら、翻訳の分かりやすさの基準をどこにおくべきかを探ってみよう。以下に、原文、次にその文章構成を簡略化したものを挙げておく。

Many architects of the early nineteenth century and later understood the new character of Piranesi's vision. Some of Sir John Soane's interiors for the Bank of England, for

example, seem almost directly derived from it, as do the interiors of his own house. The arches spring fluidly from the walls without the interruption of entablatures; light filters in from unexpected places; the vistas go on mysteriously with no apparent conclusion. But it is the modern engineer—wholly released by his nineteenth-century materialism and positivism from the humanist tradition—who has, on his own terms, constructed Piranesi's world at its appropriate scale. Paxton's Crystal Palace of 1851 overthrew the old stabilities of mass and compression, and the skeleton structure of thin iron members was seen by his contemporaries as a delightful maze. It was a place to wander in, endlessly continuous, with only glassy boundaries and with the solids fragmented into complicated webs. The Eiffel Tower, built for the French exhibition of 1889, celebrated similar compulsions and has become the landmark of modern Paris, but the Galerie des Machines at the same exhibition, found the most appropriate program, as its three-hinged steel arches swung continuously from the pavement to house vast batteries of machines and crowds of tiny human beings: Henry Adams' Dynamo and its worshipers. In Max Berg's splendid structure of reinforced concrete, the Centennial Hall at Breslau, of 1913, the arches loomed upward in a twisting curve, creating the appropriate environment for mass political man. Violent continuity and the smallness of the individual were, here again, its themes. In the Livestock Pavilion at Raleigh, North Carolina, of 1953, the roof is suspended in tension from continuous, intersecting arches, leaping out and away from the edges of vision like Piranesi's arches themselves. In all these ways the old stabilities have been upset, and human beings, in the mass, have been given an architectural environment which is an image of the modern world itself, in which they do not know exactly who or where they are. (Scully, 12-3)

Many architects ... understood the new character of Piranesi's vision.

(for example)

Some of Sir John Soane's interiors ... seem almost directly derived from it.

The arches spring fluidly ... without the interruption;

light filters in from unexpected places;

the vistas go on mysteriously with no apparent conclusion.

But it is the modern engineer who has ... constructed Piranesi's world.

released ... from the humanist tradition

Paxton's Crystal Palace ... overthrew the old stabilities of mass and compression,
and the skeleton structure of thin iron members was seen ... as a delightful maze.

It was a place to wander in, endlessly continuous

The Eiffel Tower ... has become the landmark of modern Paris,

but the Galerie des Machines ... found the most appropriate program,

as its three-hinged steel arches swung continuously ...

to house vast batteries of machines and crowds of tiny human beings:

Henry Adams' Dynamo and its worshipers.

In Max Berg's ... the Centennial Hall at Breslau ...

the arches loomed upward in a twisting curve,
 creating the appropriate environment for mass political man.
Violent continuity and the smallness of the individual were, here again, its themes.
In the Livestock Pavilion at Raleigh ...
the roof is suspended in tension from continuous, intersecting arches
 In all these ways the old stabilities have been upset,
 and human beings ... have been given an architectural environment
 which is an image of the modern world itself,
 in which they do not know exactly who or where they are.

このように文章構成を書き出してみると、バロック的な人間中心の秩序空間をピラネージ的世界の担い手である工業建築家が転覆させていったことが明快になる。更に、古い秩序を転覆させる仕方を形容する言葉“fluidly, without interruption, unexpectedly, mysteriously, no apparent conclusion, endlessly continuous”から、工業建築家たち特徴は、連続性というより迷路性、意外で（unexpectedly）謎を含んだ（mysteriously）空間の創出、つまり“a delightful maze”（喜ばしき迷路）と言えよう。このような迷路空間に新たに登場するのが近代人、つまり“tiny human beings, mass political man”であり、この近代では「自分が誰なのか、自分が置かれた状況がなんなのか分からない」のである。このような、ピラネージ的世界を要約して表現が“violent continuity and the smallness of the individual”なのである。

このように起点テキストを分析しながら、文と文の階層性や言い換え（lexical cohesion or cohesive devices）、更には情報構造などを把握し、起点テキストが伝えようとしている意味の重点を明確にしていくことで、目標言語に翻訳するときどこに重点を置いて訳出すれば分かりやすくなるのかの基準も次第に明らかになってこよう。とは言っても、分かりやすさの基準を共有することは難しい。英文構成は分かるが、それでも原文を尊重すべきと頑なな翻訳観を持っていらっしゃる方も多い。「それでわからない奴にはわからないでもよい」といった野上豊一郎的翻訳観は、亡霊のように我々について回って離れないのだ。

ここで改めて、翻訳とは何のために、誰のために行うのかと問い直してみるとよい。通常は、ある書物を原文で読むことができない読者に母国語でも読めるように提供するのが翻訳の役目であろう。例えば、他国と文書協定を交わす一国の元首に「それでわからない奴にはわからないでもよい」と言い放てる外務担当役人はいまい。「わからないでもよい」では、翻訳をしたことにはならないからだ。もし一国の元首には言えない科白を一般読者には言い放てることすれば、それは外国語が読めないものに対する翻訳者の優越意識もしくは差別意識そのものであろう。とにかく、翻訳とは、ある文書を原文で読むことのできない読者に母国語で提供する営みなのである。

翻訳が、ある文書を母国語つまり日本語で提供するのだとすると、その翻訳は日本語として理解可能でなければならない。日本語で理解可能であるためには、日本語の約束事に則っていないなければならない。この日本語の約束事を無視した翻訳が分かりにくい翻訳と言えそうである。「言えそうである」と歯切れの悪い言い方をしたのは、日本語にはない概念や日本語の文構造では言い切れないことなどは、時には日本語の約束事を破って表現せねばならないことがあるからだ。とまれスカーリーの文章に戻ることにしよう。

この翻訳の分かりにくさは、第二文で Many architects の一人として Sir John Soane が取り

上げられ、第三文では the arches, the wall, the vistas など定冠詞付きの名詞がイングランド銀行の内部であること示すなど、上の文章構成で確認した文と文の階層性が訳に反映されていないところに求められる。定冠詞を使って前文との繋がりを示すことができる英語を日本語に訳出する際には、この関係が分かるような工夫が必要だ。更に、第四文 But 以下で Soane ら正統派と対照される建設技術者の例として、Paxton の Crystal Palace から The Eiffel Tower, the Galerie des Machines, Max Berg の The Centennial Hall, The Livestock Pavillion まで例示し、But からここまでが一つのまとまった内容になっている。そして、最後に In all these ways が第二文以下の例をひとまとめに括って、the old stabilities たるバロック的な人間中心の秩序空間を転覆させ、近代に相応しい建築を生み出したと言っている。

次に、言い換え表現に注目すると、バロックと対立するピラネージ的世界の特徴が、“fluidly, without interruption, unexpectedly, mysteriously, no apparent conclusion, endlessly continuous” と形容され、かつ “delightful” な迷路と肯定的に捉えられている。表面上の言い方は異なるが、すべて同じことを指し、かつ肯定的イメージを生み出している。英語では幼稚に聞こえる同じ言葉の反復を嫌うが、日本語は逆に同じ言葉を繰り返しても幼稚だとは思わない。英語では “tiny human beings, mass political man, the individual” と異なる言い方をされる近代人を、日本語でも「小さな人間たち、大衆政治家 (?), 個人」と訳し分けると別人のように読まれてしまう。

また、バロックから決別するピラネージ的建築の特徴である “violent continuity” の violent をどう理解するのか。「はげしい (連続性)」と訳した場合、“fluidly, unexpectedly, mysteriously, endlessly continuous” であるピラネージ的建築のどこが「はげしい」と言えるのだろうか。著者のスカーリーはピラネージ的近代建築の流れを「ロマンティック・クラシシズム」と「ロマンティック・ナチュラルズム」に分け、「ロマンティック」と形容する理由を “Each was romantic because it focused with exaggerated emotional intensity upon a single, restricted aspect of human experience” (14 強調は引用者) と説明する。例えば水晶宮は、透明なガラスと鉄骨で区切られ外が見えるのだが、どこに行き着くのか分からない迷路のような空間が延々と続く。それまでの石やレンガでできっちりと区切られた空間の重々しさに対し、透明な空間が人間に与える軽やかさやわくわく感という情緒を “exaggerated emotional intensity” と言っていると解釈すれば、先の “violent continuity” の violent はこの情緒面のことを言っていると考えてよいだろう。³⁾「連続的な空間が人に与える強い印象や情感」といったところだろう。

今日、情報構造に触れていない英語学教科書はないと言ってよく、大抵、「旧情報 + 新情報 → 旧情報 + 新情報 → 旧情報 + 新情報 → …」といった情報の連鎖を載せている。⁴⁾しかし、実際の文章がこのような線状的構成で書かれることは少ないはずだ。もう一度上の文章構成を見ておく。

the modern engineer who has ... constructed Piranesi's world.

Paxton's Crystal Palace ... overthrew the old stabilities of mass and compression, and the skeleton structure of thin iron members was seen ... as a delightful maze.

It was a place to wander in, endlessly continuous

The Eiffel Tower ... has become the landmark of modern Paris,

but the Galerie des Machines ... found the most appropriate program.

In Max Berg's ... the Centennial Hall at Breslau ...

Violent continuity and the smallness of the individual were, here again, its themes.

In the Livestock Pavilion at Raleigh ... the roof is suspended

教科書通りなら、各文末の新情報が次の文の主語の位置に旧情報となって現れるといった情報の連鎖が形成されるはずだが、実際は旧情報である主題が表現を変えながら主語の位置に現れ、新情報を担う述部も同じことの言い換え表現が現れている。Paxton's Crystal Palace と主語を旧情報で揃えるための操作として、“the skeleton structure of thin iron members was seen” が受動態になっている。“The Eiffel Tower ... has become the landmark of modern Paris” と “but the Galerie des Machines ... found the most appropriate program” も、「エッフェル塔があたかも近代都市パリの象徴のように思われているが、パリ万博の申し的存在と言えば機械館なのだ」と対照を明確にするために、<主語 (= 旧情報) + 動詞 + 名詞 (= 焦点)> という文構造に設えている (the ... program の定冠詞がパリ万博を指し、program は appropriate という形容詞を支えるためだけの名詞で情報価値は少ない)。“Violent continuity and the smallness of the individual were, here again, its themes.” の “Violent continuity and the smallness of the individual” もまとめ表現なので、旧情報の位置に現れている。

以上のような分析 (あくまでも一つの例に過ぎない) で原文の意味や表現効果を充分活かしつつ、原文を母国語で提供する翻訳が目指すべき日本語としての分かりやすさも共有できるのではないだろうか。起点テキストの表現特性と表現効果を理解しそれを能う限り目標言語に移行させようとするれば、当然目標言語の表現特性と表現効果を考慮しなければ、起点テキストを活かすことにはならないはずだからだ。

今回、翻訳の分かりやすさを巡る問題群のほんの一部しか扱えなかった。例えば、英語の名詞には単複という数と冠詞の概念が明確に存在する。<石を投げる>は、throw stone は不可だが、throw a stone か stones か、あるいは the stone もしくは the stones のどれにするかを常に決めなければならない。しかし、この概念があるおかげで、どこの石をどれだけ投げたのかが分かる。学校で教育実習をする、非常勤をする、行事日程を作るなどを英語でひとことと言えば、educational experience となる。experience は不可算名詞であるが、英語話者はこの言葉に常に具体的な行為を想定する。だから、英語文章では具体的表現の前後にそれをまとめる抽象表現が必ず現れ、文と文の階層性が明確になる。しかし、日本語の名詞には単複や冠詞の概念がなく、それに漢字の抽象性⁵⁾ が加わり、概念間の上下下位の見極めがつきにくい。日本語の特性を心得ていなければ、翻訳の分かりやすさはぐんと下がってしまう。このように翻訳の分かりやすさを巡る問題群は多岐に亘るが、紙幅がつきてしまった。

注)

- 1) 具体的な文章に即して翻訳の「分かりやすさ」を考えていくので、十分に翻訳研究の成果は取り入れていない。言語学や文化論を組み込んだ翻訳研究を具体的なテキストに応用すれば、用語等の整合性など煩雑になり、かえってテキスト分析が不十分になるおそれもある。今後、翻訳研究の成果を盛り込んだ翻訳の「分かりやすさ」を論じることとしたい。
- 2) 『近代建築』は1961年初版をテキストとするが、参照したテキストは1974年改訂版である。1974年版は“Twelve Years After: The Age of Irony”を追加し、本文は変更ない。
- 3) *Webster's New World Dictionary* では、violent を “showing, or resulting from, strong

feeling or emotion”と定義する。

4) 『日英対照による英語学概論』(147)を参照した。

5) 英語では、freedom や equality は不可算名詞で a/an は不要だが、類義関係にある right, duty, obligation, decision などは可算名詞で常に具体的な権利や義務を思い浮かべながら、単複と冠詞の選択を迫られる。つまり、語の形態のレベルで freedom や equality と right 以下の語は違い、freedom や equality は right などの語の上位語として機能する。これに対し日本語は、「自由、平等、権利、義務、決定」のどこにも形態上の区別が無く、概念の上下も付きにくい。以上は、意味ではなく語の形態がその言語使用者に常に具体と抽象の選択を迫るかどうかという観点からの話である。

【参考文献】

- Baker, Mona. (2011) *In Other Words: A Coursebook on Translation*. 2nd Edition. Routledge.
- Dimock, Wai Chee, and Michael T. Gilmore. Ed. (1994) *Rethinking Class: Literary Studies and Social Formations*. Columbia University Press.
- Munday, Jeremy. (2008) *Introducing Translation Studies*. 2nd Edition. Routledge.
- Scully, Jr., Vincent. (1974) *Modern Architecture: The Architecture of Democracy*. Revised Edition. George Braziller.
- ヴァインセント・スカーリー 長尾重武訳 (1972) 『近代建築』 鹿島出版会
- 熊倉洋介 他 (1995) 『カラー版 西洋建築様式史』 美術出版社
- 長尾重武 他 (1996) 『ビジュアル版 西洋建築史—デザインとスタイル』 丸善
- 西光義弘 編 (1999) 『日英対照による英語学概論』 増補版 くろしお出版
- 野上豊一郎 (1938) 『翻譯論—翻譯の理論と實際』 岩波書店
- ワイ・チー・デイモック、マイケル・ギルモア 宮下雅年その他訳 (2001) 『階級を再考する：社会編成と文学批評の横断』 松柏社